人・ひと・ヒト

**思い出**

　昨年、戦後７０周年を迎えました。終戦間際の東京で歯科女子学生として勉学に励んでいた「木村ミツ」先生に貴重な体験談を寄稿していただいたのでご紹介いたします。

　昭和17年東洋女子歯科専門学校入学のため兄と上京、隅田堤の見事な桜並木、新築の富士寮入寮。ここで生涯の友となる青森県出身の西田さん、山形県の太田さんと出会った。上京時は何事も珍しく、上野美術館で油絵を見ては感激、見たることない手法に驚く。誰かと喧嘩し淋しくなると上野動物園へ、猿山を見て心を和やかにした。将来、お給料を貰ったら猿を飼うと思った。

　みんながヒモジクなると、小銭を出し合って片道の電車賃を工面、順番にお小遣いの調達に出向く。兄が北海道炭礦汽船の東京本社に勤務していたのでお小遣いを貰えたが、兄がいない時は義姉が裏庭で作っていた農作物の現物支給。

　４月頃かと思う、昼休み部屋で仲良し３人でお喋りしていたら、飛行機の爆音が聞こえてき、窓から身を乗り出して見る。「見たことない飛行機だネ」と云った途端に空襲警報、転がるように部屋を飛び出して校舎の地下へ、洗濯流し台に潜り「神様助けて、父さん母さん助けて」、東京の初空襲だった。また、ある晩の空襲では、足の不自由な友人が大きなリュックサックを背負ったまま逃げ遅れていた。みんなで助けようとしたが重たくて引っ張れない、リュックの中を見たら山ほどの教科書と参考書、それを泣き泣き捨てさせた。

　一生目に残るのは学徒出陣壮行会、朝まだ来ぬ大粒の雨の中神宮外苑へ、男子学生の力強い行軍。男子学生も私たちも雨でビショ濡れ。どんな事があっても女子学生は銃後を守る、国を守ると決意する。戦後、青春時代を無にしたと云う方もいるが、私達は良き青春だったと思う、目標があったから。

　３月休みの帰省中に３月10日の大空襲で校舎や寮が焼失。地元で待機との事、北炭夕張炭礦院歯科にて研修。富田習朔先生と練也先生のご指導を頂く。５月に再び上京、赤坂の高級料亭が宿舎、近くには皇族方のお屋敷があり常に営兵が立っていた。勉学というよりライオン工場に奉仕、軍事工場に奉仕の日々。山形から太田さんも到着、リュックにはお餅、食べ物がいっぱい。夜中に空襲警報が鳴る、焼夷弾が雨の様、火の粉が吹雪の様に舞う。一緒に逃げた友人の足首に焼夷弾が当たった。幸い救護所が近くにあったのでお願いする。丁度軍のトラックが来て「学生さん達乗りなさい」と云ってくれて助かる。その代り荷台に火の粉ついたら火打棒で払ってくれとの事、一生懸命棒を振る。空襲も終わりもう大丈夫でしょうと皇居のお堀ばたで降ろしてくれた。一面の焼け野原、土手の草原でひっくり返り餅を食べて、本郷の本部へと戻ろうと歩けど歩けど到着せず。やっとの思いでたどり着いたら本部は上野、院長もそちらにおられるとの事。兄が心配して汽車の切符とおにぎりを持って待っていてくれて北海道に帰る様にとの事、しかし本部の許可が必要なのでまた歩く、薄暗くなっても辺りは空襲の残り火で明るい。やっと到着したが、牛込寮で亡くなられた３人を荼毘している時だった。お参りして上野駅へ、帰夕後は再び炭礦病院へ、富田先生と女子歯科医専の入交院長とは交流があり、連絡を取って頂きそのまま研修する事となった。

　終戦の玉音放送は炭礦病院の広間で、その年に再び上京、御茶ノ水の入交院長宅で口頭試問にて文部省試験を受け卒業証書の授与、文部省より歯科医師免許証お送り頂く。前期の文部省試験は空襲のため無し、なんとなくどさくさに紛れた歯科医師誕生。そして、故郷の炭礦病院に勤務、そこで主人と出会いました。

　駆け足で「青春時代」の思い出を語らせて頂きました。本当に怖い思い、悲しい思い、苦しい思い、楽しい思い、様々な「思い出」がありました。ただ、一番心に残るのは、「生きる希望」を実感できたという事でしょうか。

　今は仲の良かった東洋時代の友達も次から次と減っていき、とうとう二人だけ、いたし方のないことですね。

（木村　悟　編集）